

んなを驚ろかせた。このような現象はあらゆる面ではしばしば見られる。一、二歳児も〇歳児に対して「つかまえ鬼」一つをとってみても、心にくいばかりの配慮が展開されていく。二歳児は一歳児、〇歳児をつかまえるのをためらい、可愛そうだという表現をしながらいたわって、一つのつかまえ鬼としてのルールを保とうとする姿は、大人の概念ではちょっと考えられない場面が展開される。体を通しての二歳児と、〇、一歳児とのかかわりの中での

この経験こそが、情操教育を身につけていく大切なことではないだろうか。  
一部年齢別中心保育と解体保育等での足がための中で、今後〇歳児を出発点としての年長児への見なおしを試みていきたい。この度は〇歳児と一、二歳児の解体が「心情」「技能」「習慣」に大きな効果をみたことについての発表にとどめた。

(岡山・なかよし保育園)

〈児童園芸学〉

秋の宝石——いろいろな実——

皆川 美恵子

北原白秋が作詞した童謡に「赤い鳥小鳥」というのがあります。

白い鳥、小鳥、  
なぜなぜ白い。

白い実を食べた。

赤い鳥、小鳥、  
なぜなぜ赤い。  
赤い実を食べた。

青い鳥、小鳥、  
なぜなぜ青い。  
青い実を食べた。

いつも歌を口ずさむ、歌好きな子どもでもなかった私ですが、短くて簡単なこの歌の歌詞とメロディーはすぐ覚え、知らないうちに歌っていました。そして、赤い鳥や白い鳥や青い鳥のほかにも、黒い鳥、黄色い鳥、橙々色<sup>だいた</sup>の鳥、桃色の鳥、茶色の鳥

と、いろいろな色の鳥をあてはめて、元氣いっぱい、その替歌を歌っていききました。

世の中には、いろとりどりの鳥がいるのに、たった三つの色の鳥だけでおしまにするのは、子ども心にもおさまりきらないものがあつたのだと思います。

ところがです。歌ってみると、黒い鳥、黄色い鳥まではいいのですが、橙々色の鳥、桃色の鳥となると、俄然がぜんいそがしくなつてきます。その上、桃色の鳥では、「なぜなぜ桃色」か、「なぜなぜ桃色」か、わからなくなつてきました。歌はだんだん元氣がなくなつていきました。そしてそのうち、鳥はどこかへ飛んでいってしまいました。

今思うと、子どもの私が、この童謡を気に入つたのは、蜜柑をたくさん食べると指先が黄色くなるように、赤い実をたくさん食べれば赤い鳥になり、白い実をたくさん食べれば白い鳥になり、青い実をたくさん

食べれば青い鳥になるんだろうという子どもらしい直接的な理解からだったと思えます。それに加えて、「なぜなぜ赤い」——「赤い実を食べた」と、問いと答えて言い切られているのが、より説得的に効ない心に響いたのでしょう。きっと小さい私は、鸚鵡がうむのようなきれいな鳥は、いろいろな色の実を食べて、あんなに美しくなつたのだと理解していたことでしょう。

秋が深まりゆくとともに、木の实、草の实は、しだいに鮮かに色づいていきます。林檎、柿、梨、桃などの秋果も楽しみですが、美しい木の实、草の实も、すてきな目の御馳走です。鳥たちだけに、いろいろな美しい実を食べられてしまつては残念です。負けずに、秋の宝石のようなとりどりの実を染しもうではありませんか。自然界では、赤い実が一番多いためでしょうか、その目立つ色のためでしょうか、

赤い実が一番よく目につきます。おもな赤い実がなる植物をあげてみましょう。梅うめ擬なま、常碧山楡じやうひやくさんじゆ子、莢蓮けいれん、椅い、木斛もくこく、くろがねくろがね、青木あおき、藪柑子やぶかんし、千両せんりやう、万両まんりやう、紅したんべに、蔓梅擬つるうめし、美男葛びなんかづら、花茗荷はなみやが、南天なんてん、万年まんねん、青などとたくさんあります。

これらのうち、万両、青木、梅擬、南天は白実をつける品種があります。

青い実の植物では、濃青色の実がなる沢さわ塞さい、青黒色の実の支那移南天しななうつなんてん、藍色の実の藪茗荷やぶみやが、それに、サファイア・ブルーの实をつける竜の鬚りゆうのひげなどがあります。

黒い実をつける植物では、鼠麴ねずみもち、犬黄いぬわう楊やう、楠くすのぎ、八手やち、橄欖オリーブ、松扇まつあしなどがあります。ぬばたまぬばたまと言われて、活花やドライフラワーに使われます。

その他、変わった色のものといへば、黄橙色のピラカンサ、それに藤色の紫式部で

しょう。

実をつけるこれらの植物は、花々が咲きにぎわう初夏の頃、花をつけます。しかし、目立たない小さな花なうえ、青葉に隠れてひっそり咲くので、見過ごしてしまいます。花は散ります。そして、夏から秋へと向かう中で、秘かに静かに実が熟してゆきます。

冷やかな秋の深まりとともに、秋の花が終ります。やがて木の葉も落ち出します。そして木の枯れの淋しさが訪れます。ちょうどそのような時、淋しさを忘れさせるかのように、色とりどりの実が鮮かな姿を現わしはじめます。秋の寶石は、美しく、豊かに輝きわたるのです。

私には、三種類の好きな実があります。一つは、赤い実の山帰来さんきらいです。またの名を、さるとりいばらという蔓性のこの植物には、散形に、ひきしまった光沢のある赤

い実がぶらさがります。直径六、七センチメートルはある大きな一つ一つの粒はしっかりしていて、時間がたつてもとれません。臘脂ろうじ色味を帯びた落ちついた美しい赤い実は、クリスマスに活けても、お正月に活けても似合う、モダンで古雅な花材です。

私は山帰来という、この名前も大いに気に入っています。山の奥深くに生い育った植物という感じがしないでしょうか。また山帰来の葉は、関西では、かしわもちをつくるのに用いられているそうです。正月頃、関西に行つてぜひかしわもちを食べてみたいと思っています。

二つ目は、藤色の実の紫式部です。これも名前が何とゆかしいことでしょう。紫式部は日本の山野に自生している落葉低木です。この紫式部より小低木で、実もわずかに小さく、そのかわり緊密につく、同じように美しい紫色の実がなる小紫式部という

植物もあります。

源氏物語の作者、紫式部には、ただ一人の愛娘がいました。大式だいしき三位さんみという人です。この人は、お母さんのように物語作家としての才はありませんでした。しかし、お母さんより和歌の才がすぐれていたという事です。その大式三位に、

はるかなる もろこしまでも

行くものは

秋のねぎめの 心なりける

という歌があります。

涼しく澄んできた秋、深い眠りから気持ちよく目覚めた心地は、遙かな唐土たうど、今で言えば北歐、いやそれよりも遠い遠い世界へ心が誘われるようだという歌のようです。すがすがしい、何か一つを深く求めて旅するような、素直で力強い歌ではないでしょうか。藤紫という色は、永遠に何かを憶れてやまない青色と、女性的なやさしい赤みの色が感じられます。この藤紫色に輝

いた母子は、秋の林でどんなことを語り合  
うのでしょうか。

私が好きな三つ目の実は、サファイア・  
ブルーに輝く竜の鬚です。常緑宿根草であ  
るこの植物は、冬でもあおおおとして、細  
長い鬚のような葉を上げられています。こ  
の竜の鬚の青い実を知ったのは次のような  
ことからでした。

小高い青山墓地を散歩していた時のこと  
です。石屋さんから、おじいさんと、小学  
生二年位の孫の男の子が出てきました。お

じいさんは十五センチメートル位の竹をも

っています。二人は道のふちに茂っている

草むらをかきわけて、「そっちにたくさん

あるか？」——「ある、ある」と言い合っ

て、何かをとっています。そしてそれを竹

筒につめ、水鉄砲の要領で押して飛ばしま

した。私は何か青いものをつめ、青いもの

が飛んだように思い、驚きました。

二人が去った後、その草むらをかきわけ

て、のぞいてみました。するとそこには、  
外の葉からは信じられない位に美しい、ま

っ、青な実がたくさんなっていました。竜

は、宝物の玉をそうやって隠していたので

す。それは正月の松飾りがとれた冬休みだ

ったと思います。おじいさんが昔遊んだ竹

鉄砲を、松飾りのいらなくなつた竹でつく

り、孫にその遊び方を教えていたのでしょ

う。

それから、「草の実の おびただしきを

隠し持ち 事もなげなる 秋の庭かも」

(窪田空穂)という一首を知りました。私は  
すぐ、竜の鬚のことを思いうかべました。

